

教 育 研 究 業 績 書

令和 5年 4月 1日

氏 名 芝 田 史 仁

研 究 分 野	研究内容のキーワード	
基礎生物学	生物学、行動生態学、哺乳類学、保全	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事 項	年 月 日	概 要
1 教育方法の実践例		
① 視聴覚教材を活用した授業	平成 14 年 4 月～ 現在に至る	和歌山信愛女子短期大学の全学共通の教養科目「自然と生物」および、生活文化学科食物栄養専攻の専門科目「解剖生理学」、生活文化専攻の「人体の構造と機能」(令和5年度～)、保育科の「保育内容演習(自然)」 「子どもの自然遊び」にて、パワーポイントで作成した画像資料を用いた授業を行っている。画像や動画などの視覚的資料を示しながら解説することで、学習者の内容理解に役立てている。
② 体験型アクティブラーニングを導入した授業	平成 14 年 4 月～ 現在に至る	和歌山信愛女子短期大学保育科の専門科目「保育内容研究Ⅰ」(平成 22 年度まで)、平成 23・24 年度からは「保育内容演習(環境)」(令和 2 年度まで)、「保育内容演習(自然)」, 令和 2 年からは「子どもの自然遊び」にて、体験型アクティブラーニングを導入した授業を行っている。科学遊びや自然遊び、飼育・栽培活動、数・量・図形にかかわる保育などを実際に体験することで、保育者としての実践力育成に役立てている。
③ 社会貢献事業と連携した実践的教育プログラム	平成 26 年 4 月～ 平成 29 年 3 月	和歌山信愛女子短期大学保育科の専門科目「卒業研究Ⅱ」にて、和歌山市と共に本学が行っている子育て支援事業と連携した実践的教育プログラムを行った。本学の子育て支援室「ふれ愛ルーム木のおうち」を利用する親子との「サツマイモ掘り」や「子育て広場」を利用する親子との「森の遊び」を、学生が主体的に計画・実践することで、保育者としての指導力・実践力育成を図る。
④ ルーブリックを活用した学修成果の評価	平成 26 年 10 月 ～令和 2 年 3 月	和歌山信愛女子短期大学生活文化学科食物栄養専攻の専門科目「解剖生理学実験」において、ルーブリックを導入し、レポートの成績評価および指導に役立てた。

2 作成した教科書、教材		
① 講義用パワーポイント資料	平成 14 年 4 月～ 現在に至る	和歌山信愛女子短期大学の全学共通の教養科目「自然と生物」および、生活文化学科食物栄養専攻の専門科目「解剖生理学」、生活文化専攻の「人体の構造と機能」（令和 5 年度～）、保育科の「保育内容演習（自然）」「子どもの自然遊び」にて使用している。毎回の講義の要点と関連する動画や画像をパワーポイント資料としてまとめたものである。希望者には講義終了後も閲覧を許可し、講義内容の復習等に役立っている。
3 教育上の能力に関する大学等の評価 ① 和歌山信愛女子短期大学の授業評価アンケート結果における評価	令和 5 年 2 月	和歌山信愛女子短期大学において 2022 年度に実施された学生による授業評価アンケートの結果によると、本人が担当の授業の総合評価は、「自然と生物」4.5 点、「紀の国の自然」4.1 点、「解剖生理学」4.5 点、「保育内容演習（自然）」4.3 点、「子どもの自然遊び」4.2 点、と高い評価を得ており、学生の満足度が高い結果となっている。
4 実務の経験を有する者についての特記事項 ① 和歌山信愛女子短期大学附属幼稚園食農教育講師 ② 和歌山信愛女子短期大学 FD 研修会講師 ③ 和歌山県保育研究会講師	平成 22 年 9 月 平成 27 年 8 月 平成 28 年 2 月	和歌山信愛女子短期大学附属幼稚園における JA 和歌山と連携した食農教育の一環として、園児を対象に、ダイコンを中心とした野菜について講演を行う。 和歌山信愛女子短期大学の教職員を対象とした FD 研修会で講師を務め、「ループリックを作って、分かりやすい授業作りを目指そう！」というテーマの講演とワークショップを指導した。 和歌山県内の保育所職員、県及び市町村関係職員を対象とした研修会における分科会で、講師として参加し、助言を行った。
5 その他 ① 和歌山信愛女子短期大学保育科における教育実績	平成 14 年 4 月～ （現在に至る）	和歌山信愛女子短期大学保育科の専任教員（平成 20 年 3 月まで講師、平成 20 年 4 月～平成 22 年 3 月まで准教授、平成 22 年 4 月～平成 29 年 3 月まで教授）および兼任教員（平成 29 年 4 月～）として以下の科目を担当した。「自然と生物」（平成 14 年 4 月～平成 31 年 3 月、令和 5 年 4 月～現在に至る）「保育内容研究Ⅰ」（平成 14 年 4 月～平成 23 年 3 月）「総合演習」（平成 14 年 4 月～平成 23 年 3 月）「保育内容演習（環境）」（平成 23 年 4 月～令和 2 年 3 月）「卒業研究Ⅰ」（平成 23 年 4 月～平成 29 年 3 月）「保育内容演習（自然）」（平成 24 年 4 月～現在に至る）「卒業研究Ⅱ」（平成 24 年 4 月～平成 29 年 3 月）「子どもの自然遊び」（令和 2 年 4 月～現在に至る）「紀の国の自然」（令和 2 年 4 月～現在に至る）

② 和歌山信愛女子短期大学生 活文化学科食物栄養専攻にお ける教育実績	平成 15 年 4 月～ (現在に至る)	<p>和歌山信愛女子短期大学生生活文化学科食物栄養専攻の兼任教員(平成 15 年 4 月～平成 29 年 3 月)および専任教員(平成 29 年 4 月～現在教授)として以下の科目を担当した。</p> <p>「自然と生物」(平成 15 年 4 月～平成 27 年 3 月)「解剖生理学」(平成 15 年 4 月～現在に至る)「解剖生理学実験」(平成 15 年 4 月～令和 2 年 3 月)「基礎演習」(平成 29 年 4 月～令和 2 年 3 月)「卒業研究」(平成 29 年 4 月～現在)「食育実践演習」(令和 2 年 4 月～令和 3 年 3 月)「紀の国の自然」(令和 2 年 4 月～現在に至る)「自然と生物」(令和 4 年 4 月～現在に至る)</p> <p>平成 29 年 4 月～令和 3 年 3 月まで、和歌山信愛女子短期大学生生活文化学科長。</p>
③ 和歌山信愛女子短期大学生 活文化学科生活文化専攻にお ける教育実績	令和 2 年 4 月～ (現在に至る)	<p>和歌山信愛女子短期大学生生活文化学科生活文化専攻の兼任教員(令和 2 年 4 月～現在に至る)として以下の科目を担当した。</p> <p>「紀の国の自然」(令和 2 年 4 月～現在に至る)「自然と生物」(令和 5 年 4 月～現在に至る)「人体の構造と機能」(令和 5 年 4 月～現在に至る)</p>
④ 和歌山信愛女子短期大学に おけるその他の教育実績	平成 14 年 4 月～ (現在に至る)	<p>平成 14 年 4 月～和歌山信愛女子短期大学の教務委員として学生の履修指導、カリキュラム編成等の教学支援業務に携わり、平成 25 年 4 月より、教務部長としてカリキュラム・マネジメントに携わり、現在に至る。</p> <p>平成 24 年 4 月より、自己点検評価委員として、自己点検評価報告書の作成に中心的立場でかかわり、全学の教育 3 方針(ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシー)の策定、カリキュラムマップ、カリキュラムツリー、ナンバーリングの構築、学生生活調査の実施に主導的立場で関わった。</p> <p>平成 24 年 4 月より、和歌山信愛女子短期大学の、文部科学省平成 25 年度「地(知)の拠点整備事業」「子育て支援を主軸とした地(知)の拠点事業『きょう育の和』」に、申請段階から中心的立場で関わり、事業の企画、立案、計画、運営に携わると共に、平成 27 年 4 月より平成 30 年 3 月まで、きょう育の和センター長。</p> <p>平成 29 年 4 月～平成 30 年 3 月、及び令和 3 年 4 月より、和歌山信愛女子短期大学自己点検・評価委員会 ALO として活動、現在に至る。</p> <p>平成 28 年 6 月～平成 31 年 3 月まで、平成 31 年 4 月開学の和歌山信愛大学の大学設置準備委員会の委員として、設置計画の立案及び設置申請書の作成において中心的役割を果たす。</p>
⑤ 常磐会短期大学幼児教育科 における教育実績	平成 23 年 4 月～ 平成 25 年 3 月 まで	常磐会短期大学兼任講師として、「子どもの自然」を担当した。

職務上の実績に関する事項		
事項	年 月 日	概 要
1 資格、免許 ① 修士（理学） ② 博士（理学）	平成 6 年 3 月 平成 18 年 6 月	大阪市立大学第 1269 号 「修士論文題目：ホンドタヌキの行動生態と個体群の研究」 大阪市立大学第 4910 号 「博士論文題目：ヒメネズミ <i>Apodemus argenteus</i> の個体群動態、社会構造および子どもの性配分について」
2 特許等 ① ②		特になし
3 実務の経験を有する者についての特記事項 ① ②		特になし
4 その他 ① 和歌山県レッドデータブック改訂委員会専門委員としての活動 ② 和歌山市教育委員会事務評価委員会委員としての活動 ③ 和歌山市長期総合計画審議会委員としての活動 ④ 外来種リスト作成・和歌山県レッドデータブック改訂に係る専門調査員 ⑤ 和歌山市社会教育委員としての活動	平成 21 年 9 月～平成 24 年 3 月 平成 25 年 7 月～現在に至る 平成 27 年 9 月～29 年 3 月 平成 28 年 9 月～令和 5 年 3 月 平成 30 年 4 月～現在に至る	和歌山県レッドデータブック改訂委員会専門委員として哺乳類分野を担当し、和歌山県レッドデータブック（2012 年改訂版）の発行に寄与した。 和歌山市教育委員会事務評価委員会の委員として、和歌山市教育委員会が行う教育に関する事務の管理及び執行の状況の点検・評価を行い、教育行政の適正化に寄与した。 和歌山市が策定を進めている長期総合計画の審議会委員として、計画案を審議し、答申案をまとめるのに寄与した。特に、「子ども・いきいき部会」の部会長として、子育て・子育てⅡ関わる施策の審議を先導し、部会案をまとめるのに寄与した。 和歌山県が改定を目指す、和歌山県レッドデータブック並びに外来種リスト作成のため、哺乳類部門に関する専門調査員として貢献した。 和歌山市教育委員会社会教育委員として、和歌山市教育委員会が行う社会教育事業への助言、勧告、評価を行い、社会教育の推進に寄与した。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(著書) 1 『日本動物大百科 1：哺乳類Ⅰ』	共著	平成8年2月	(株)平凡社	<p>本書は、日本に生息する哺乳類全種について、分布、サイズ、特徴、生態を各分野の研究者が解説する総合図鑑である。</p> <p>A4判 156頁 編者：川道武男 本人担当部分：「タヌキ」(pp. 116-119)を単著。</p> <p>日本に生息するタヌキの分類や形態的特徴、国内外の分布に加え、食性や行動、運動能力、社会的行動、生息環境、繁殖、行動圏、社会構造等について総説した。タヌキが極東アジアの固有種であること、自分では巣穴を掘らずに、多様な場所を巣として利用すること、木に登ることもできること、時には集団で行動すること、食性は雑食性で、年一回の繁殖期があること、ため糞をする習性とその生態的意義、一夫一妻の繁殖システムとオス親による育仔参加など、タヌキ固有の特性を文献に基づく情報と筆者自身の野外研究での成果を交えながら解説した。</p>
2 『冬眠する哺乳類』	共著	平成12年10月	東京大学出版会	<p>本書は、さまざまな分野で冬眠現象に取り組んできた研究者たちが、冬眠する哺乳類の生態、生理、さらに冬眠制御や冬眠誘導など応用研究の可能性について語る、日本で初めての冬眠研究の書である。</p> <p>編者：川道武男・近藤宣昭・森田哲夫 A5判 全352頁 本人担当部分：第5章「ヤマネ」(pp. 162-186)を単著。</p> <p>本章では、「冬眠するネズミ」として日本や世界で認識されるヤマネ科動物の冬眠行動について、その生態的意義や生理的機構についての最新の研究成果を、文献による情報と筆者自身の野外での研究成果を基に総説した。特に、日本の天然記念物であるヤマネについて、長野県浅間山麓で筆者自身が得た未発表の研究成果を基に、その冬眠期間、冬眠開始要因、冬眠場所と冬眠前同居、食性、繁殖、性成熟と寿命、日内休眠と巣の利用パターン、行動圏について概説し、ヤマネの生活史における冬眠習性の意義について考察した。</p>

3 『我が家の動物・完全マニュアル-ハムスター』	共著	平成12年1月	(株) スタジオ・エス	<p>本書は、ハムスターの飼育・医学・生態・歴史について、一般読者を対象とした解説書である。 監修者：長崎拓也・石橋 徹 B5判 159頁 共著者：川道美枝子・芝田史仁 本人担当部分：コラム「ハムスターと冬眠」(pp.152-155)の主要執筆。全文を執筆し、共著者が加筆・修正を行った。</p> <p>本コラムは、哺乳類の冬眠について、齧歯類のハムスターを例に挙げながら解説したものである。冬眠とは何か、哺乳類に見られる冬眠の3タイプとその特徴、冬眠する哺乳類の種類、ハムスターの貯食習性、冬眠開始要因、冬眠の生理的メカニズム、寿命と冬眠の関係、冬眠や日内休眠期間中のエネルギー代謝、冬眠と睡眠の違い、冬眠する理由など、野外や実験室内で得られた最新の研究を、広く一般の読者を対象として分かりやすく紹介した。</p>
4 『生態学から見た里山の自然と保護』	共著	平成17年4月	(株) 講談社	<p>本書は日本各地の里山をテーマに、各地域の筆者から手稿を集め、一つにまとめたもの。里山とは何か、という初歩的な問題はもちろんのこと、里山保全の努力が傾けられてきた各地の事例が数多く収録されている。 監修者：石井 実 A5判 全239頁 本人担当部分：第2章の一部「里山の動物，ヤマネの生活史」(pp.124-127)を単著。</p> <p>1996年から2000年にかけて長野県浅間山麓にて行ったヤマネの生態調査の結果を基に、亜高山帯から低山にかけての森林に生息するヤマネの生活史について、その巣の利用パターンを中心に、概説した。</p>
5 『日本の哺乳類学 ① 小型哺乳類』	共著	平成20年5月	東京大学出版会	<p>本書は、複雑な進化の歴史をたどる日本の哺乳類の約7割を占める小型哺乳類について、その多様な自然史を分類、生態、形態、遺伝など、日本の哺乳類研究の最前線を走る多彩な研究者が、自身の研究成果を基に読み解いたものである。 編者：本川雅治 A5判 全311頁 本人担当部分：第7章「小さなK戦略者の生態と生活史 ヤマネ」(pp.200-222)の単著。</p> <p>1996年から2000年にかけて長野県浅間山麓にて行った野生ヤマネの生態</p>

6	保全上重要なわかやまの自然-和歌山県レッドデータブック [2012年改訂版]	共著	平成24年3月	和歌山県環境生活部環境政策局環境生活総務課自然環境室	<p>調査の結果を基に、ヤマネの生態、繁殖、冬眠、個体群構造など生活史について概説した。</p> <p>本書は、和歌山県内の野生生物種だけでなく、「那智の大滝」、「橋杭岩」等県内の貴重な地形・地質を含めて「保全上重要なわかやまの自然」として平成13年に取りまとめられたものの改訂版である。和歌山県における野生動植物及び自然環境の現状を示す貴重な資料となっている。</p> <p>編集：和歌山県環境生活部環境政策局環境生活総務課自然環境室 A4判 全442頁 本人担当部分：1哺乳類 (pp. 25-40) の共著。</p> <p>本章では、和歌山県内に生息する哺乳類において、絶滅の恐れのある、保全上重要な種を選定し、その選定の理由、種の概要、分布状況、生息条件、学術的価値、減少の原因、文献等を記した。和歌山県レッドデータブック改訂委員会専門委員(哺乳類)として、現地調査・種を選定及び原稿の一部執筆・編集に携わった。</p>
7	『和歌山県の外来種リスト』	共著	平成31年3月	和歌山県環境生活部環境政策局環境生活総務課自然環境室	<p>和歌山県内で確認された外来種を哺乳類、鳥類、は虫類、両生類、魚類、昆虫類、貝類、その他無脊椎動物、植物ごとにリストとしてまとめたもの。</p> <p>本人担当部分：(1)哺乳類 (p. 12) の共著。</p> <p>専門調査員として哺乳類外来種リスト作成に関与する。</p>
8	保全上重要なわかやまの自然-和歌山県レッドデータブック [2022年改訂版]	共著	令和4年11月	和歌山県環境生活部環境政策局環境生活総務課自然環境室	<p>本書は、和歌山県内の野生生物種だけでなく、「那智の大滝」、「橋杭岩」等県内の貴重な地形・地質を含めて平成13年にまとめられた『保全上重要なわかやまの自然-和歌山県レッドデータブック』、平成24年に改訂された『2012年改訂版』、に続き、平成28年から専門調査員による現地調査結果や学術的知見等を取りまとめ、改訂したものである。新たに「菌類」と「その他無脊椎動物」を追加し、10分類群・1,655種の稀少生物を掲載している。加えて、貴重な動植物が多く生息・生育する生態系が連続する地域等を「生物多様性保全上注目すべき地域」として掲載・解説している。</p> <p>編集：和歌山県環境生活部環境政策局環境生活総務課自然環境室 A4判 全783頁 本人担当部分：1哺乳類 (pp. 67-84)</p>

				<p>の共著。</p> <p>本章では、和歌山県レッドデータブック改訂専門調査員（哺乳類）として、現地調査及び種の選定、原稿の執筆・編集に携わり、和歌山県内に生息する哺乳類において、絶滅の恐れのある、保全上重要な種を選定し、種の概要と分布状況、選定理由、文献等を記した。</p>
(学術論文)				
1 ホンドタヌキの行動生態と個体群の研究 (修士論文)	単著	平成6年3月	大阪市立大学	<p>タヌキの生態に関する野外調査と、各都道府県の傷病鳥獣保護センター等に対するアンケート調査によって調べたタヌキの保護状況、タヌキ個体群における感染症の流行状況についてまとめ、解析を行った。小型発信器を用いた個体追跡調査によって、調査地内で同性のタヌキが互い重複しない行動圏を持つことや、ため糞が行動圏の周辺部に分布することを示した。さらに、アンケート調査の結果から、感染症の流行にはタヌキ個体群の密度上昇が密接に関係している事を既存の数学モデルをもとに示した。</p>
2 Decline of raccoon dog populations resulting from sarcoptic mange epizootics. (査読付き)	共著	平成11年1月	Mammalia 63: 281-290	<p><u>Shibata, F.</u> and T. Kawamichi. 本人担当部分：全文の責任執筆。</p> <p>日本のタヌキ個体群における疥癬症の流行状況を、各都道府県の鳥獣保護センター等に対するアンケート調査によって明らかにし、年間保護頭数や狩猟統計の変動パターンから、疥癬症の流行にはタヌキ個体群の密度上昇が重要な要因となっている事を示した。さらに、既存の数学モデルや、タヌキの繁殖、疥癬症の潜伏期間などに関する既知のデータを用いて、疥癬症の進入を許すタヌキ個体群の限界密度を推定した。</p>
3 Nest site selection by the Japanese dormouse, <i>Glirulus japonicus</i> . (査読付き)	共著	平成16年2月	Journal of Mammalogy 85(1): 117-124	<p><u>Shibata, F.</u>, T. Kawamichi and N. Nishibayashi. 本人担当部分：全文の責任執筆</p> <p>ニホンヤマネによる巣の利用パターンを、長野県浅間山麓にて行った小型発信器を用いた個体追跡調査によって明らかにした。ヤマネは様々な樹上空間や地下を巣場所として利用すること、巣は毎日のように代え、巣のタイプや利用パターンには生息している森林タイプや個体の性が影響を与えている事を明らかにした。さらに、このような巣利用パターンとヤマネの日内休眠能力との関係を考察した。</p>

4	ヒメネズミ <i>Apodemus argenteus</i> の個体群動態、社会構造および子どもの性配分について (博士論文)	単著	平成18年6月	大阪市立大学	ヒメネズミの繁殖生態と個体群動態が繁殖に与える影響を、長野県浅間山麓に設置した巣箱と毎日の見回りによる個体追跡調査によって明らかにした。繁殖期、配偶システム、メス行動圏の空間構造、出生性比などに見られる変動が、個体群密度や、生息環境に依存していること示した。さらに、不安定な環境下では、一夫多妻型ネズミ類によるメス偏りの仔への性配分が適応的になるという新たな仮説を提唱し、他の仮説との比較を行った。
5	Uniparental care and activity of nursing females of <i>Apodemus argenteus</i> during the lactation period on Mt. Asama, Central Japan. (査読付き)	共著	平成20年9月	Mammal Study 33: 111-114	Hayashi, S., F. Shibata, and T. Kawamichi 本人担当部分：野外での共同調査、研究指導、および、調査データの提供、論文の校閲 野外において、野生ヒメネズミの育児行動を巣箱とビデオカメラによって観察した。その結果、従来、一夫一妻の繁殖システムを持ち、オスが育児に参加すると考えられてきたヒメネズミにおいて、少なくとも授乳期間中はメスのみが育児をすることを明らかにした。
6	Female-biased sex allocation of offspring by an <i>Apodemus</i> mouse in an unstable environment. (査読付き)	共著	平成21年7月	Behavioral ecology and sociobiology 63(9): 1307-1317	Shibata, F. and T. Kawamichi 本人担当部分：全文の責任執筆 ヒメネズミの出生性比に影響を与える環境要因を、長野県浅間山にて1998年～2000年にかけて行った、巣箱を用いた個体追跡調査によって明らかにした。ヒメネズミのメスは出生時の子どもの性比や体重を操作していることを明らかにすると共に、子の性比や体重が、母親の体重やドングリの豊凶によって左右されることを示した。
7	ヤマネとヒメネズミの巣箱利用における性差と競合種の影響	共著	平成23年1月	リスとムササビ 26: 13-23	芝田史仁・川道武男 本人担当部分：全文の責任執筆 ヤマネとヒメネズミの巣箱利用のパターンと影響する要因について、長野県浅間山麓で1998年と1999年に行った巣箱調査の結果を基に明らかにした。巣箱利用の季節性や性差にみる両種の違いを明らかにすると共に、両種が鳥類の利用する巣箱を逃避していることを示した。
8	保育者養成課程における体験型学習を取り入れた保育	単著	平成29年3月	和歌山信愛女子短期大学「信愛紀	保育内容（環境）の指導法にあたる保育内容研究Ⅰ（演習2単位 通年）の授業内で実践した、サツマイモの栽

	内容（環境）の指導法授業実践報告：サツマイモの栽培について			要」	培体験学習について報告した。体験学習は、本学保育科1年生を対象に2006年度から導入し、2010年度まで行った。栽培活動に関する授業は講義2回、体験学習4回で計画した。実施した体験活動は、耕作・土作り、苗植え、水やり・除草・根返しなどの世話、収穫・試食である。各体験活動について内容を報告するとともに、保育者養成課程の授業において、サツマイモの栽培活動体験を取り入れることの教育的意義と課題について考察した。
9	和歌山県内における森林性哺乳類の生息状況と巣箱自動撮影法の可能性（査読付き）	共著	平成29年6月	南紀生物 59(1) : 8-15	芝田史仁・細田徹治・鈴木慶太 本人担当部分：全文の責任執筆 和歌山県に生息する森林性哺乳類の生息状況を、巣箱と自動撮影カメラを組み合わせて調査した結果を報告した。
10	和歌山県黒蔵谷国有林のコウモリ類（査読付き）	共著	平成29年6月	南紀生物 59(1) : 46-47	原田正史・細田徹治・芝田史仁・原田京子 本人担当部分：共同研究のため抽出不可。 和歌山県田辺市にある黒蔵谷国有林において行ったコウモリ類の生息調査の結果を報告した。調査の結果、クロホオヒゲコウモリ、ノレンコウモリ、モリアブラコウモリの生息を確認した。特に、ノレンコウモリ及びモリアブラコウモリは、和歌山県内発の採集記録となった。
11	紀伊半島南部で確認された巣箱で冬眠するヤマネ <i>Glirulus japonicus</i> （査読付き）	共著	令和元年6月	南紀生物, 61 (1) : 19-22	芝田史仁・細田徹治・揚妻直樹・鈴木慶太・清水善吉 本人担当部分：全文の責任執筆 紀伊半島南部にある北海道大学和歌山研究林で行ったヤマネの生息調査において、巣箱で冬眠するヤマネの事例2件を確認し、報告した。巣箱内で冬眠するヤマネの特徴や巣箱に持ち込まれた巣材、巣箱周辺の環境について報告するとともに、ヤマネが巣箱で冬眠する要因について考察を行った。
12	和歌山県内におけるヤマネ <i>Glirulus japonicus</i> の生息状況（査読付き）	共著	令和2年12月	南紀生物, 62 (2) : 98-102	芝田史仁・細田徹治・揚妻直樹・鈴木慶太・清水善吉 本人担当部分：全文の責任執筆 2009年～2019年にかけて、和歌山県内7箇所山林で行ったヤマネの生息調査の結果を報告した。調査の結果、紀北から紀南まで、県内の山地全域にヤマネが生息している可能性が明らかになった。加えて、環境省レッドリストカテゴリーの判定基準（2019）を元に、調査で得られたデ

<p>13 和歌山県における哺乳類の記録（査読付き）</p>	<p>共著</p>	<p>令和2年12月</p>	<p>南紀生物, 62 (2) 別冊 : 1-21</p>	<p>一タを評価し、和歌山県内のヤマネの生息状況を考察した。</p> <p>清水善吉・細田徹治・鈴木慶太・原田正史・佐々木歩・<u>芝田史仁</u> 本人担当部分：共同研究のため抽出不可。</p> <p>和歌山県の哺乳類相を把握することによりレッドリスト作成の基礎資料を得ることを目的として、文献・標本調査及び現地調査を行い、得られた情報についてのデータベース化をはかった。本報は、和歌山県レッドデータブック 2022 年版哺乳類についての評価の基礎となる分布情報であり、評価の妥当性の検証に資するための資料である。</p>
<p>(その他) 「学会発表」</p> <p>1 鳥獣保護行政の下、保護された傷病タヌキに見る皮膚病の流行</p> <p>2 ヤマネの自然巣・巣箱の利用パターンと奇妙な社会関係</p>	<p>—</p> <p>—</p>	<p>平成6年10月</p> <p>平成9年10月</p>	<p>日本哺乳類学会 1994 年度大会 (東京農工大学)</p> <p>日本哺乳類学会 1997 年度大会, (北海道大学)</p>	<p>都市近郊に生息するタヌキ個体群におけるかいせん症と思われる皮膚病の流行の実態を明らかにするために、1992 年から 1993 年にかけて、全国の動物園および鳥獣保護センターに対してアンケート調査をおこなった。その結果、かいせん症と思われる皮膚病が、12 の都道府県にわたり全国的に流行していること、全国的にタヌキの年間保護件数が急増していること、個体群が急増した直後にかいせん症の流行が見られること、神奈川県下における感染症流行の状況等が明らかになった。これらの結果を基に、タヌキ個体群における個体群密度の増加と感染症の流行との関連性を示した。 共同発表者：<u>芝田史仁</u>・川道武男 本人担当部分：研究の計画・実践・発表</p> <p>1996 年 5 月～1997 年 7 月 24 日(現在)まで、長野県の浅間山中腹にて巣箱を用いてヤマネの追跡調査を行った。巣箱外から中の個体を確認するために、捕獲個体にはマイクロチップを内蔵した首輪を付け、一部の個体には首輪型小型発信機を装着した。調査期間中はほぼ毎日巣箱のチェックと発信個体の泊まっている場所を日中に特定した。ヤマネは多くの泊まり場を転々としており、特に交尾期の雄には毎日泊まり場を変える個体もあった。また、同一の自然巣と巣箱を共同利用することがあった。 共同発表者：<u>芝田史仁</u>・川道武男・西林健一郎</p>

3	マイクロチップを利用した小哺乳類の野外調査法	—	平成9年10月	日本哺乳類学会 1997 年度大会, (北海道大学)	<p>本人担当部分：研究の計画・実践・発表</p> <p>ヤマネとヒメネズミの野外調査で、マイクロチップを首輪に装着し追跡する方法を開発した。巣箱の中にいる個体は、巣箱外から確実に個体識別ができた。反応があった巣箱では、内に2頭のマイクロチップを付けた個体がいる場合にも2個体を特定できた。小型発信機を装着した個体を追跡して自然巣を発見した後、定期的に自然巣を見回り、マイクロチップを装着した個体の発見につとめた。自然巣が高さ 2m 以上の樹桐にある場合には、読み取り機を改造して 3m まで伸びるポールにとりつけて 4m の高さの樹桐まで調べた。</p> <p>共同発表者：芝田史仁・川道武男・鈴木健一</p> <p>本人担当部分：研究の計画・実践・発表</p>
4	巣箱での同居が示すニホンヤマネの個体間関係	—	平成10年10月	日本哺乳類学会 1998 年度大会, (富岡市中央公民館)	<p>長野県浅間山中腹(標高 1,500m)のミズナラ林とカラマツ林で 1997 年 4 月～1998 年 7 月 10 日までに行ったヤマネの生態調査の結果について報告した。特に、同一の巣箱内に複数の個体が同時に存在する「同居」高頻度で観察され、その観察時期と同居個体の構成から、ヤマネの社会関係について考察した。</p> <p>共同発表：芝田史仁・川道武男</p> <p>本人担当部分：研究の計画・実践・発表</p>
5	出生時期のずれがヤマネの仔の運命をどのように変えるのか	—	平成10年10月	日本哺乳類学会 1998 年度大会, (富岡市中央公民館)	<p>長野県浅間山中腹(標高 1,500m)のミズナラ林とカラマツ林で 1997 年 4 月～1998 年 7 月 10 日までに行ったヤマネの生態調査の結果について報告した。特に、長期個体追跡の結果から、出生時期とその後の冬眠開始時期、繁殖回数との関わりについて示した。</p> <p>共同発表：芝田史仁・川道武男</p> <p>本人担当部分：研究の計画・実践・発表</p>
6	ヒメネズミの母親による春と秋の繁殖投資の違い	—	平成11年10月	日本哺乳類学会 1999 年度大会 (名古屋大学)	<p>ヒメネズミの繁殖パターンの解明を目指し、1998 年 4 月～1999 年 7 月まで、長野県・浅間山中腹(標高 1500～1700m)にて、巣箱を用いて行ったヒメネズミの生態に関する野外調査の結果をもとに、春と秋の繁殖パターンの違いについて報告し、ヒメネズミの母親が、春はできるだけ大きな仔を早く産み、秋はできるだけ多くの仔を産もう</p>

<p>7 ヤマネの繁殖回数を制限している要因</p>	<p>—</p>	<p>平成11年10月</p>	<p>日本哺乳類学会1999年度大会 (名古屋大学)</p>	<p>とすること、春はできるだけ早い時期にオスを産もうとすることを明らかにした。 共同発表：芝田史仁・川道武男 本人担当部分：研究の計画・実践・発表</p> <p>ヤマネの繁殖パターンの解明を目指し、1997年4月～1999年7月まで、長野県・浅間山中腹(標高1500～1700m)で行った野外調査の結果を基に、ヤマネの年間出産回数を制限する要因を、冬眠開始時期と体重との関係から考察した。 共同発表：芝田史仁・川道武男 本人担当部分：研究の計画・実践・発表</p>
<p>8 野外でのヒメネズミの育児行動-春と秋の繁殖期での違い-</p>	<p>—</p>	<p>平成11年10月</p>	<p>日本哺乳類学会1999年度大会 (名古屋大学)</p>	<p>1999年に、長野県浅間山麓にて、野生ヒメネズミの繁殖行動を巣箱とビデオカメラを用いて観察した結果について報告し、授乳期間中、メスのみが育児に参加していること、春と秋で授乳期間中のメスの巣箱滞在時間および出入りのパターンが異なることを示した。 共同発表者：早石周平・芝田史仁・川道武男 本人担当部分：研究の指導、共同調査、データ提供</p>
<p>9 ヒメネズミ (Apodemus argenteus) の出生性比操作と個体群変動</p>	<p>—</p>	<p>平成14年3月</p>	<p>第61回日本生態学会大会</p>	<p>1997-2000年に、長野県浅間山麓の標高1500-1700mの調査地に、巣箱を197個かけ、毎日の見回りと個体追跡によるヒメネズミの生態調査を行った。出産直後に得られた計105リターの親子のデータと周辺部のメス密度から、以下のことが明らかになった。ヒメネズミの母親は、環境の飽和度が低くなるに連れて息子よりも娘を多く産んでいた。環境の飽和度が高い時、体重の重い母親ほどより体重の重い仔を産み、より多くの息子を産んでいた。飽和度が低い時、娘の体重は母親によらず一定であったが、体重の重い母親ほどより多くの娘を産んでいた。一方、体重の軽い母親ほどより重い息子を産み、一腹の総重量ではより息子に多く投資していた。 共同発表：芝田史仁・川道武男 本人担当部分：研究の計画・実践・発表</p>
<p>10 ヒメネズミの巣箱利用と繁殖システムに影響する環境</p>	<p>—</p>	<p>平成15年3月</p>	<p>第62回日本生態学会大会</p>	<p>ヒメネズミの繁殖システムに変異をもたらす環境要因について発表した。1998～2000年に、長野県浅間山麓で、</p>

	要因			<p>巣箱を 197 個設置し、ヒメネズミの個体追跡調査を行った。その結果夏～秋に、カラマツ林で成獣メス同士の巣箱共有が頻繁に観察されたが、ミズナラ林では、単独で巣箱を利用していた。成獣メス同士の巣箱利用パターンと巣箱周辺的环境要因について、対数回帰分析を行った結果、巣箱周辺のサクラやヤマブドウの現存量が秋の成獣メスの巣箱共有に影響を与えていたことが明らかになった。雄は複数の雌が共有している巣箱でより多く観察され、対数回帰分析の結果、オスの巣箱利用にはメスの巣箱利用が影響していた。</p> <p>共同発表：芝田史仁・川道武男 本人担当部分：研究の計画・実践・発表</p>
11	Adaptive sex allocation by the small Japanese field mouse <i>Apodemus argenteus</i> in unstable population	— 平成17年8月	IX International Mammalogical Congress (札幌コンベンションセンター)	<p>1997-2000 年に長野県浅間山麓にて行った野生ヒメネズミの個体追跡調査を基に、ヒメネズミの巣箱利用と繁殖行動を解析した。183 個体の成獣（オス 77 匹、メス 106 匹）を個体追跡し、出産直後の 105 リターの幼獣を調べた結果、以下のことが明らかになった。ヒメネズミは多様な繁殖システムを示すことが示唆された。また、生息密度や餌条件、メスの体重が一腹の仔数や性比、子の出生体重に有意に影響を与えることが明らかになった。餌条件が良く、生息密度が低い季節に出生性比はメスに偏っていた。体重の重いメスは多くの娘を産んでいた。一方、餌条件が悪い季節には、重いメスは息子を多く産んでいた。</p> <p>共同発表：芝田史仁・川道武男 本人担当部分：研究の計画・実践・発表</p>
12	Life history of the Japanese dormouse, another arboreal rodent and hibernator in Japan.	— 平成24年2月	6th International Colloquium on Arboreal Squirrels (下京区開法会館)	<p>1997 年から 1999 年に長野県浅間山麓にて、巣箱を 197 個設置して行ったヤマネの個体追跡調査の結果を報告した。143 匹のヤマネを個体識別し、追跡した。ヤマネの生息密度は 1 ヘクタール当たり 1.0 匹～1.2 匹であった。成獣定着個体のうち、2 歳以上の個体は 24.2% ～35.5% を占めていた。発情期には 5 月と 7 月の 2 回のピークが見られた。メスは最大で年 2 回繁殖していた。ヤマネは樹上や地下など多様な場所を昼間の泊場として利用し、頻繁に泊場を変えていた。行動圏の平均はオス 5.8 ± 6.2 ha、メス 1.1 ± 0.5 ha で、オスの方が大きく、重複していたが、メスは互いに重なるの少ない行動圏を示した。</p>

<p>13 和歌山県内におけるヤマネ (Glirulus japonicus) の生息状況と森林性大・中型哺乳類生息調査における巣箱自動撮影法の可能性</p>	<p>—</p>	<p>平成28年9月</p>	<p>日本哺乳類学会 2016 年度大会 (筑波大学)</p>	<p>共同発表：芝田史仁・川道武男 本人担当部分：研究の計画・実践・発表</p> <p>和歌山県内のヤマネの生息状況を明らかにするため、2009～2016 年にかけて、県内 7 カ所の森林地帯に巣箱を延べ 143 個設置して調査を行った。うち 2 カ所では、2015 年 5 月より 15 個の巣箱に自動撮影カメラを設置し、利用個体を調べた。結果、7 カ所でヤマネの生息を確認できた。ヤマネの繁殖時期が和歌山県では比較的遅いことが推察された。さらに、延べ 7342 回の撮影を行い、哺乳類撮影回数は 582 回、鳥類 1124 回であった。撮影された哺乳類は 11 種で、ニホンジカが最も多く、次いでイノシシであった。地上生哺乳類の撮影率は、全哺乳類の 61.2% に登った。 芝田史仁・細田徹治・揚妻直樹・鈴木慶太 本人担当部分：研究の計画・実践・発表</p>
<p>「報告書」 1 シバ群落の生産的特性</p>	<p>共著</p>	<p>平成3年3月</p>	<p>平成元年度科学研究費補助金 (一般研究 C) 研究成果報告書『金華山島の群落の退行遷移 (ギャップ形成と草原群落の拡大) に及ぼすシカの影響 25-36</p>	<p>高槻成紀・芝田史仁 本人担当部分：共同研究のため抽出不可。</p>
<p>2 ヤマネの森で体験したこと</p>	<p>単著</p>	<p>平成16年12月</p>	<p>リストとムササビ</p>	<p>芝田史仁 1996 年～2000 年にかけて、長野県浅間山麓で行ったヤマネの生態調査での体験を報告したもの。</p>
<p>3 小さな K 戦略者ヤマネ (Glirulus japonicus) の生活しと繁殖</p>	<p>単著</p>	<p>平成21年6月</p>	<p>南紀生物 11(1): 64-65</p>	<p>芝田史仁 平成 20 年度秋の研究発表大会記念講演要旨</p>
<p>4 和歌山県内に生息する森林生稀少ほ乳類の生息調査</p>	<p>共著</p>	<p>平成28年 3 月</p>	<p>文部科学省平成 25 年度地 (知) の拠点整備</p>	<p>芝田史仁・細田徹治 本人担当部分：全文の責任執筆 巣箱と赤外線自動撮影カメラの組み合わせにより、和歌山県内に生息する</p>

<p>「講演等」</p> <p>1</p> <p>2</p> <p>3</p>	<p>平成20年11月</p> <p>令和1年11月</p> <p>令和3年11月</p>	<p>事業選定取 り組み和歌 山信愛女子 短期大学 「子育て支 援を主軸と した地 (知)の拠 点事業『き ょう育の 和』におけ る地域志向 教育研究奨 励金</p> <p>南紀生物研 究発表会記 念講演</p> <p>AWS 動物学 院特別講演</p> <p>和歌山信愛 女子短期大 学公開講座</p>	<p>森林性哺乳類の生息状況を調べた。延べ 3137 カメラ・日中, 1626 回の撮影イベントが記録された。そのうち, 哺乳類が 406 回、全 11 種が撮影された。巣箱で最も良く撮影されたのはニホンジカであった。次いで、イノシシの撮影頻度が高かった。希少種のニホンカモシカとツキノワグマも確認出来た。樹上性哺乳類では、Apodemus 属のネズミ類が最も多くこのほか、ニホンリス、ヤマネ、ムササビなどの樹上性齧歯類とテンが確認された。</p>
---	---	--	--